

---

# 忘れてあげない

愛理

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

忘れてあげない

### 【Nコード】

N6572A

### 【作者名】

愛理

### 【あらすじ】

自分の声で目が覚めた。電話もメールもできるけど……あの人を  
思い出すとなぜか涙がでる。ふっと寂しくなる瞬間。その時、蘭は

……

## 第1話：変わらないね

「 待って、新一っ！」

「 …………… ヲメかぁ。 」

まだ、心臓はバクバクツと音をたてていた。

「 ふう。 」

つと息を吐き、蘭はゆっくりと上半身を起こし、

「 ……何、泣いてるんだろ。 」

そう言って涙で濡れた枕をそつと触った。

ブロオ、ブオオオ……………つと新聞配達バイクの音が遠くで聞こえた。

早起きしすぎね。とふふつと笑ってしまった。水を飲みに行こうと立ちあがると、さっきまで見てた夢と、同じようにあの人が楽しそうにピースしてる写真が目についた。斜めまえにはワタシ。数時間後には会えなくなってしまっなんて、考えもしなかった。あれ？

…写真の中の二人の顔が曇っていく。パジャマの袖でゴシゴシと擦れば擦るほど、手首には冷たさが広がってゆく。

「 うっ……………うっ……………」

つとしゃくりあげ、床に座りこんでしまった。

トントントントン

「ふああああ、おはよお蘭ねえちゃん。」

目を擦りながら、コナンはお弁当を作ってる蘭の背中に向かって挨拶した。

「おはよ！コナン君。あつ、顔洗ってきたら、玄関から新聞取ってきてくれる？」

野菜を切る手を止めて、振り返りコナンにそう頼んだ。

「あ、はい。」  
半分しか開いてない目をパシパシさせながら、コナンは洗面台へ向かった。

「よし！お弁当完成っ」

淡いピンク色のお弁当箱の隣に、それより小さめの仮面マイバーの絵が描かれてるお弁当箱。

そこには、蘭が作ったおかずが綺麗に詰められていた。

ガチャ

「新聞持ってきたよー。」

着替えを済ませたコナンが持ってきた新聞をテーブルの上に乗せた。

「あ、ありがと。コナン君。」お茶碗にご飯を盛ってる蘭

「お父さん、ご飯できたよー!!」

「……………ぐうぐうごおっ……………」

返事の代わりに大イビキが返ってきた。

「まあ、遅くまで飲みあるしてるんだから。先食べちゃおう、コナン君!」

ブツブツと文句を言いながら小五郎の茶碗によそった味噌汁を鍋にもどした。

「そうだね。(あいかわらずうるせーイビキ。)」

そう言つて、蘭から2人分の味噌汁をうけとりテーブルに持って行くこうと向きをかえると

「あっ、」

自分の弁当箱からヒョッコリと顔をだしてる

「それっかわいいでしょ?タコさんウィンナー!」

と蘭に紹介されたそれと目があった(?)コナン。

「う、うん。かわいいね。ありがと蘭ねえちゃん!!(…高2にもなつてタコさんウィンナーかよ。)」

つとコナンは心の中で、ハハハと苦笑した。

## 第1話：変わらないね（後書き）

初めまして。愛理です。

小説が書きたい！衝動にかられ勢いでかきました。

感想ありましたらよろしくお願いします。文章力無くてすみません。

## 第2話・浮き沈み

「いただきまーす！」

コナンが毛利家にお世話になるようになってからは、朝食のほとんどが和食である。今朝のメニューは、ご飯に味噌汁、焼き魚とキウウリの酢の物。まったくもって日本の食卓風景。

（焼き魚なんて俺いつ作ってたっけかな？）

3年前から両親が外国に行ってる工藤家。

一応出発前、有希子に家事全般を叩き込まれた新一だが、なんといつても男子高校生。朝は目玉焼きにトースト。コーヒだけで済ませるのが専らだった。なので朝から米を炊くなんてことはまずありえない。夕御飯の残りをレンジで温めることはあっても朝から何か作るという概念は彼にはないのだ。

（…俺ん家のグリル、カビてねえよなあ、…）  
目の前の鯖の塩焼をつつきながらふっと、コナンは自分の家のキッチンを思い浮かべていた。

「…どうしたのコナン君？お箸止まってると。お腹でも痛いのか？」  
心配そうにコナンの顔を覗き込む蘭。

「や、んーん別になんでもないよ。大丈夫！」

そう、笑顔で答えるコナンに蘭はちよっと考えてから

「あーそっか今日の天気、気にしてたのね。」

と言って、振り返りタンスの上にあるテレビのリモコンをとってボタンを押した。

ピッ

っという機械音をだし目の前のテレビは明るくなった。

(いや、別にそーゆわけじゃないんだけど…)

自分の家の魚焼き器の心配してたなどは、伝わるわけがなく蘭はカチカチとチャンネルを変えている。

「昨日は、晴れ後雨って言ってたけど…。大事な社会科見学に雨だったらやだもんね、コナン君？一応てるてる坊主吊したんだけどなあ……」

本日、帝丹小学校の1年生は社会科見学。いつも弁当は蘭1人分だよいのだが、今日はそういう理由で仮面ライダーの弁当箱が隣にあったのだ。

どの局も今の時間はスポーツニュースや、議員の汚職問題、映画ランキングなどが流れていて、天気予報はまだやってないようだった。

「うーん、どこもやってないねえ。」

カチカチ、カチ、カチ

『 今日はずがすがしい天気でしょう。』

「良かった！今日は雨降らないみたいね！」

画面の向こうから綺麗な花壇の映像と天気予報がながれてきた。

「うん。良かったー！」

(ケーブルテレビか、、、)

なんともローカル臭い番組を横目に、残りのご飯をさっさっとかきこむ。

「ごちそうさまでしたー！」

空になった食器を重ね流し台に持って行くことと立ち上がることをコナンに

「いいわよ。私片付けとくから。ほらほら！遅刻しちゃうよー！」

そう言っけてリュックを渡そうとする蘭。彼女からリュックを受け取るうと近よる。

「うん。ありがと蘭姉ちゃん！」

そう、お礼を言おうと視線を上げてみるが見慣れているはずの幼馴染みの顔に少しの違和感を覚えた。

「…あれ、目どうしたの？ちょっと腫れてない…？」

充血気味の瞳をまじまじと見つめる、その少年の眼差しに、一瞬ドキリとした。

「…んと、テストが近いから遅くまで勉強してたの。それでね。」

いつもどおりパツチリと瞳を開かせ答えてみた。さっきまで瞼に覆われてた視界が急に広がったので窓から入る日の光りが少々眩しい。

「(そーいや、期末の時期だなあ。ふーん。…大変だなあ、高校

生はー。」  
当たり前障りのない返事をしたつもりだったが、蘭に噴出されてしまった。

「…つぶ、ふふ。あはは！」

(……………)

コナンは顔中にハテナマークをこれでもかと浮かべている。

「ちよつと、蘭ねーちゃん!？」

未だに、くすくす笑ってる彼女にジト目で話しかける。漸く、呼吸を落ち着かせた蘭が手をあわせ謝った。

「ゴメン、ゴメンちよつとツボに入っちゃて！気にしないでね!…  
そおーよ。コーコーセイは大変なの！だからしよーがくせいのうち  
にいっぱい遊んでおきましょう！ね！」

「…うん。」

(…つたく、朝からテンションたけーぜ。この女…)   
いまいち消化しきれていないが、これ以上考えていると本当に遅刻しそうだったので、まあいいかと自分を納得させた。

行ってきまーす！

足早やに玄関を飛び出し、トントんと軽快に階段を降りる。  
道路に出て10mほど進んだところで振り返ってみた。3階の窓から、彼女がひらひらと手を振っている。振り返すと、早く行きなさいとジェスチャーするのでコナンは向き直り帝丹小学校目指しゆっくりと歩いて行った。

「だって…、なんかおかしくって。」

リュックを背負い直している小さな男の子を見つめ、そう呟いてみた。風が熱った頬をそっと撫でる。

時折みせる大人びた顔

私の心臓をこんなにも速く動かす…

不思議な子

無邪気な笑顔にホツとする

やっぱり子供なんだなあって

だけどね、そんなところも全部、全部アイツに似てる

いつも側にいた

…新、一

「…っ」

不意に出てしまった幼馴染みの名前に驚き、思わず口に手を当てた。自分で発した言葉に頭が体が、心が反応する。一瞬時が止まったかのような錯覚に陥った。

トクン・・

いつもと変わりなく脈うつ心臓にハツとした。速いわけでも、大きいわけでもない鼓動に少し焦る。

それを拭い去りたくて、もう一度、唇を触っていた。そっと、確かめる様に触れた。リップクリームを塗る様にスウーッと横に滑らす。

堅く詰むんだ唇がゆっくりと開く。そして、もう一度その名を呼ん

でみた。小さく息を吐きだすように。それでいてはつきりよ。

新一……………

立ち尽くしている少女の周りを風だけがさらさらと流れて行った。

## 第2話・浮き沈み（後書き）

ケーブルテレビって結構面白いですよね？（笑）

今回は彼の登場です。彼らも登場します！

それではここまで読んで下さったみな様ありがとうございました！

### 第3話…カゼの噂

(あー…)

「あちいー……………」

被っていた帽子を取り、パタパタと扇ぐ。それでも暑い。少しでも暑さをしのぐと、ブロック塀の陰に避難する。ヒンヤリとした空気に安堵のため息が出た。

「ふうー。…しかしまあ、よく晴れたねー。」

まだ8時前。見上げた空には高く高く太陽が昇っている。昨日までぐずついていた天気が嘘の様に晴れあがっていた。久々の晴天に、タンスの隅においやられてた、半袖シャツもお呼びがかかった。

「……………ツクシヨンツツ。」

ブルツと身震いする。開けていた第2ボタンをさっと閉めた。いつの間にか汗も引いている。鼻をこするとまたもや鼻孔にツーンという衝撃が走った。

「……………ツハツツ」

……………フウ。」

本日2回目のくしゃみは不発に終わった。

が

一発目よりも豪快な出だしに周囲の人の注目を一身に浴びていた。あまりにも間の抜けた終わりかただったので、一瞬の沈黙の後でクスクスと笑いが起こった。女子高生からは、カワイイー！など指をさされる始末。

そんな状況に居た堪らないコナンは多少顔を赤らめながら帽子を被り直す。そして一刻もその場から離れたかったので足早に次の曲がり角を目指した。

(昨日はあんなに寒かったのに……。こんなんじゃ、風邪ひくぜ。)  
手のひらだけ日陰からだすと、ぽあんとした暖かさが伝わってきた。  
(……風邪……)

出した右足を引っ込め立ち止まる。丁度、トマレの文字の辺り。別に交通ルールを守ろうとしたわけではない。  
突然、脳裏に今朝の彼女の顔が浮かんだから。心做しか、瞳が潤んでいたように思え、そこがひっかかった。

(風邪…あいつ、風邪ひいてたのか?)

「や、鼻声ってわけでもなかったし……」

無意識に顎に手をあてブツブツと言いながら角を曲がると、

「おーい、コナン!」

「おはようございます!」

お馴染の声が聞こえてきた。コナン同様、リュックを背負っている元太と光彦の2人が阿笠博士の家の前で手を振っている。

「おっつ」

右手を軽く上げて応えた。

「おめーら、早えーな。まだ約束の10分前だぜ?いつもならギリギリなのに。」

腕時計に目をやるコナン。時間は丁度8時。

「だってよー、今日は遠足だぞ遠足！！俺、よく眠れなかったぜ。」  
目を爛々と輝かせ、興奮気味に話す元太。そこに光彦が口を挟む。  
「違いますよ、元太君。遠足じゃなくて社会課見学です！それに僕  
が迎えに行っただ時には気持ち良さそうに寝てたじゃないですか！  
！」

「べ、別に、なんでもいいじゃねーか！！おやつだって持っていつ  
ていいんだしよ！」

そう言つてポケットからチョコの袋を出す。一気にビリッと袋を破  
きおまけのカードをとりだした。一連の動きがあまりにも自然且つ  
鮮やかだったので、呆気に取りられるコナンと光彦。

「…なんだよ。またコロツケ男爵かよ。」

落胆の声が元太の口から出た。どうやら目あてのカードではなかつ  
たらしい。

「あー、それ僕も5枚くらいもってますよ。」

「俺なんて10枚だけ。。くそつ、ざこイモ男爵！！」

元太に雑魚よばわりされたコロツケ男爵。乱暴にズボンのポケット  
に突っ込まれたコロツケ男爵。

無情にもグシャッと折れ曲がってしまったコロツケ男爵。…そんな  
ことなどおかまいなしに元太は口をガツと開けチョコを流し込んだ。

「…あーあ、ハイパーゴールデンヤイバーカードでねえかなあ。」

モシヤモシヤとチョコを食べながら呟くその姿は、まさにおっさん。

「オヤジくさいですよ。元太君…。…つてええ！？2個目あけるん  
ですかー！？？」

驚き半分、呆れ半分の光彦。本能に忠実な少年元太。…苦笑するコ  
ナン。

時間は8時5分。約束の時間まであと少し。

### 第3話：カゼの噂（後書き）

お久しぶりです。

のわりに話しが全然、進んでいません。

しかも「彼」を出せませんでした（> <）

次回こそ！

それではここまで読んで下さったみな様、ありがとうございました  
！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6572a/>

---

忘れてあげない

2010年10月17日03時44分発行